

短歌

眞宮起雲選

(地) 山梨 大野 敏

春夕へ目しひの乳母に雛糊の供物わかちぬ白桃のまど

(人) 京都 笹井しげ

めでまぜし梅の一枝に歌つるし亡き父しのふ春の朝や

(人) 東京 田邊 孝

巡禮がすてし小笠のくちめより生ひ出でにけむしる葦草

伊藤 藤天郎

朝明けや霞を揺れてきこゆなり太古に似たる笙の響きよ

山吹の花にかくるゝ窓のうちに歌の小さきを獨笑みしか

吉田 春蘭

雨をわびてこゝ山里に七日経ぬわが家の緋桃色あせにけむ

櫛の手に春寒わぶる朝戸出や背戸の白梅にほひこほるる

高木 紅玉

歌に添えし桃のあかきがこぼれたり匂ひの御句永久に忘れじ

宵なれや花ちりかゝる欄干に君が嘆きく春の興かな

山口 芳水

湧きかへる胸の血潮のとはしりて狂ふかのこゝ紅梅のちる

平岩 學洋

結びては思ひ亂るゝ糸柳のもつれくにはる風のふく

飯塚 曉霞

雲雀高き雲井に鳴きてのどかなる春の終日摘草ぞする

林 静子

晒貝に歌をしるしてそと笑みてまた波の音に思ひつゞくる

村田 藤子

臙夜を料紙召しませ姫君の笑まひにちるか白梅のはな

井出 佐美

瘦せし身をかこつにあらで世の限り道につくさむ我涙哉

竹中 清久

花蔭に紙燭またゝく廣庭をさまよう人の小唄ゆかしき

森 貞子

うす絹につまれしこと花と我と春を領する臙夜のつき

宵殿の闇の思ひに香をしたひ窓おして見るわが運命かな

吉野 絹

櫻闇の朱塗りあせて鐘寒うゆふ日かすかに花ちりかゝる

夢にして君と登りし高塔をめぐる白鳩あさ日に榮ゆる

田邊 孝

高鳴くや雲雀の姿雲に消えて菜の花十里かすみこめたり

うらぶれて野にくち果てん我世とも見んは興ある蔭の臺かな

大西 益子

春探る菅笠姿うら若う詩の領よぶひとなつかしき

臙の世に狂ふ手力擧るなしと歎とりて笑む春の畑園

笹井しげ

唄らひて永き秋にまみかくす舞子の肩に花ちりかゝる

花雨を窓にわびぬる籠居こもりや琴とれば音のしめりからなる

起 雲

春明けや仰げばかすむ天地に花とわれとのうたの領かな
天つ女がけはひの料とかしこみて匂ふに似たり春の草花

◎短歌募集

△課題 隨意

△〆切 毎月末日

△發表 本誌上

△賞品 三光には粗景を呈す

△選評 眞宮起雲

△投稿 用紙は隨意にて左記の所に送らるべし

但添削及返稿を要せらるゝ方は往復はがき

又は切手封入にて送られたし。

「伊勢國白子局區内みどり短歌會」

第二十回俳句端書集

大分

岡山

長野

仙臺

川越

川越

春月

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

人